

岐阜農林高校 『衣』

◎ □ △ ○ ▽ ☆ ◎ □ △ ○ ▽ ☆ ◎ □ △ ○ ▽ ☆ ◎ □ △ ○ ▽

岐阜農林高校は「移動が速い賞」です。

袖から袖への移動と、転換が気付かないうちに終わっているからです。

暗転がなく、転換も含めてキャスト一人一人の動きに無駄がなく、ドアとかないのに、教室や部室から、ファミレスやカラオケ・ボックスになったりするのが見事でした。現在から過去へ、その切れ目がないのに、ちゃんとその場面になっている。照明や音響、大道具、小道具が必要最小限で、なおかつ作り込まれていて、違和感なく変化を見ることができました。

もちろん、キャストも大人数なのに、まるでマ스ゲームを見るように舞台上で動いて演技して、衣装もその場面にふさわしい最小限の変化をさせ、だれ一人無駄な動きがなく、それでいて一人一人がリアルな感情を表現していました。

お話は、全国常連の演劇部その 3 年間で社会人になった彼らが振り返る、ということで身近な共感できるものでした。ただ、強豪校ならではのプレッシャー、全国へ出なければ、出て当たり前、という重圧は傍からでは分からない、重いものがあるのだと引き込まれました。上級生から下級生へと伝えられる伝統、それは「誇り」であると同時に、「重い重い呪い」なのだ、と思いました。

でも、そんな中でも、自分が頑張らなければ、と一人で背負ってしまう〈ゆいな〉と部長でありながら、みんなを積極的に引っ張ることができない〈まゆ〉。どんな集団にもある、「結果を出さなければ意味がない」という考えと「自分たちみんなが楽しめなければ意味がない」という考え。そんな美野農業演劇部にも「コロナ=大会中止」という、どうしようもない、自分たちの力ではなんともできない運命が襲います。そのとき、〈ゆいな〉は折れてしまうけれど、〈まゆ〉は大会がなくても自分たちの劇を最後までやることで、「つなぐ」ことはできる、と言います。自分のことを置いて行けという〈ゆいな〉と置いていくことはできないと言う〈まゆ〉の場面に、ぐっときました。

「自己責任」、できないのはお前の努力が足りない、という風潮。「格差社会」、「弱者切り捨て」。コロナ禍で露わになってきた社会全体を覆う問題に、演劇が果たす役割を問うているようなそんなものを感じました。そう考えると、これは伝統校、岐阜農林だけの問題ではなく、私たち一人一人に突きつけられた問題なのだ、と思いました。

岐阜農林高校の皆さん、お疲れ様でした。

◎ □ △ ○ ▽ ☆ ◎ □ △ ○ ▽ ☆ ◎ □ △ ○ ▽ ☆ ◎ □ △ ○ ▽